

## お経を唱える

敬虔な仏教徒にとって、各寺院の本堂と大師堂でお経を読むことは、四国遍路の大切な要素です。この読経と、同じ経典の写しを納めるという代替行為は、いずれも「納経」と呼ばれます。この言葉は、お遍路に関する様々な文脈で使用されます。たとえば、必須となる2つのお堂で祈った後、朱印と墨書きをいただく手帳のことを納経帳と呼びます。厳密に言うと、納経帳の墨書きと朱印は、所有者がそのお寺でお経を奉納したことを証明するためのものです。日本語が読め、読経したいという人は、発音する通りに仮名がふられた経典を買うことができます。この経典を読むと、本堂と大師堂で唱えられる経典がいかにより異なるかがはっきりとわかります。

本堂で唱えられる主な経典は、般若心経、各寺院の御本尊真言、そして光明真言です。ほとんどの場合、御本尊真言は本堂に掲げられた板に平仮名で書かれているので、お経を唱えるのが初めてという巡礼者は、それを読むことから始めると良いでしょう。3回連続で唱えるのが望ましいとされています。大師堂では、般若心経、光明真言、そしてお遍路の創始者である弘法大師の真言が唱えられます。お遍路の初心者には、そのうち最後のお経から始めると良いでしょう。「南無大師遍照金剛」というわずか8文字です。通常、弘法大師の真言は、3回以上繰り返されます。